

女性の骨盤の進化？

シェイクスピアの4大悲劇のひとつ、マクベスの中に、「女の股（また）から生まれたものには殺されない」というセリフがある。将軍マクベスが魔女の予言を聞いたことをきっかけに疑心暗鬼になり、周囲の者たちを殺して行くという悲劇であるが、その中でマクベスがどんな敵にも殺されるはずがないという意味で魔女が放ったことばである。最終的には「自然分娩」ではなく「帝王切開」で生まれたという敵に成敗されるという揚げ足取りのような落ちではあるが、その時代にいかに帝王切開で生まれるのが特別であったかということを反映しているとも言えよう。

分娩の苦しみは、アダムとイブがリンゴを食べたために懲罰としてイブに与えられて以来、人類に課せられた宿命であるのだが、麻酔の技術や抗生物質の普及にともない、現代では昔にくらべてはるかに安全に帝王切開が可能になったこともあり、日本では約25%が帝王切開分娩となっている。帝王切開が必要になる理由のひとつに、胎児骨盤不適合がある。胎児の大きさにくらべて、産道を構成する骨盤の穴が狭すぎて通過できないという意味である。2016年にオーストリアの研究者らが報告した論文によると、胎児骨盤不適合の頻度が1960年台にくらべて40年で2割増加したという。帝王切開がなければ助からないような狭い骨盤のもとになる遺伝子は本来淘汰されるはずであるが、帝王切開の増加により狭い骨盤の遺伝子が受け継がれるようになったのが原因の可能性もあるとも指摘している。もし医療介入により人間が進化しているというのが本当であれば驚きである。

古くから、男性が魅力を感じる女性の体形は、ふくよかな乳房と大きな骨盤であるとされてきた。繁殖能力が高い身体的特徴に異性が魅力を感じるという本能からは自然なことである。しかしちかごろテレビでもてはやされる女性たちは皆細身でおしりが小さいようにみえる。もはや人間が子孫を反映するためにメリットのない「大きい骨盤を持つ」という特徴は、人間の意識の仕組みにまで変化をもたらしているのかもしれない。

とはいえ、帝王切開は手術なりのリスクがあるのは確かであり、自然分娩にも理屈ではない意味を見出すこともあるだろう。日本で無痛分娩がそれほど普及しないのにも無意識に「自然な」経過を良しとする国民性もあるのかもしれない。

医療の発達は確実に人間に至福をもたらしてくれているが、変わることもない人間らしさも見失わずにいたいものである。

【産婦人科診療部長 定方 久延】

